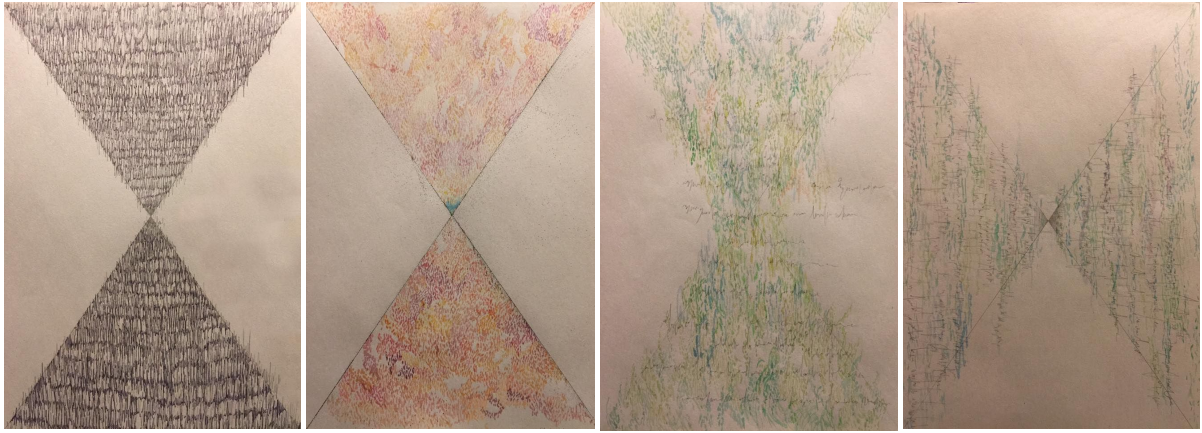


ドローイングの話



「Drawing」 2017.3

下園：俺は電車乗りながらよくドローイングするね。このシリーズは、思いっきり枠に収めてるんやけど、枠に収めてるからこそ、その中のうねりを感じるというか。

高原：やっぱりルールに収める、その中のせめぎ合いっていうか。この線描があるじゃないですか。横断してるやつ、これが静脈ってぼくがいい。

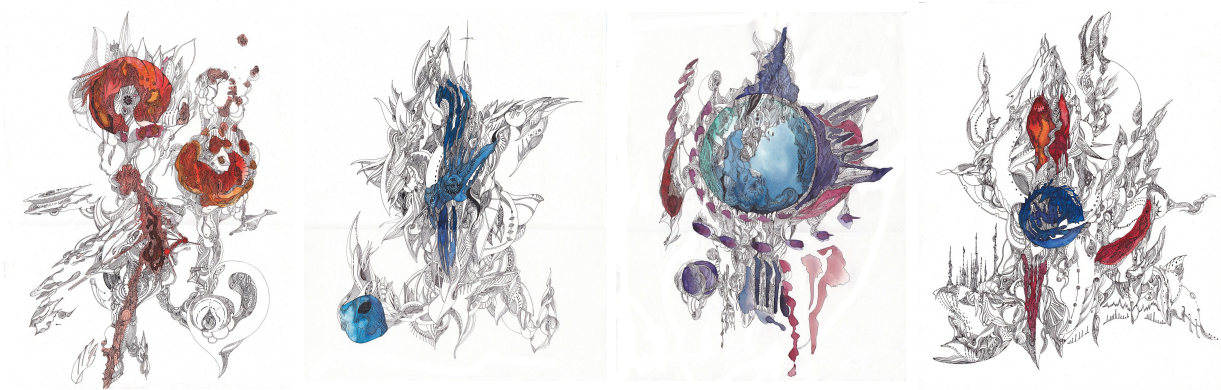
下園：これに関しては自由な状態で描けてるから。やっぱ自由に描けてるってのはいいよな。

高原：そのドローイングのルールって、対角線引いて上下の中を描いていくっていうので、他にもうちょっとルールってあります？

下園：これに関しては、螺旋を意識したりしてるところもあるけど、実はあんまりなくて、こういう風に点描をしてるところもあるし。全体を通していえるのは、エネルギーを描き込むっていう意識で。色とかにおいて、例えば、赤色やったら炎とかを意識するやんかそういう。これやったら植物とか。かなり、エネルギーをっていう意識が基本的に先行してあって。

本田：エネルギーっていうのは？

下園：エネルギーっていうのは、物事において流動する幅広い意識や力の事で。色によって緑やったら、植物の芽生える、伸びていく意識とか。螺旋状を意識している時やったら、そのまま渦を巻いていく流動する力とか。後は、これとかやったら振動する様子を表してて、横向きで描いてるから大地の揺れるイメージやったり。そういうところから、色によっては雪の降る静かな場面やったりとか。エネルギーっていったら、少し前まで、「強さ」という意識をもって描いてたけど、実はすべてのものにエネルギーはあるから。あとは、これは世界ができる時のイメージ。これとこれは丸が入ってるんやけど。個人的に作品の構図が、ちょっとシンメトリーばかり使ってちゃダメなんかなって思ってたんやけど。僕は元々シンメトリーが好きなので、このドローイングは軽い気持ちでもできるってのがあって、結構精力的に試したら感覚の上で言いたいことが言いやすくなってきた。僕の中では、丸って自然のエネルギーの感じ、直線ってのは人為なんよ。で、人為で世界を区切ってるっていう感覚？でも中心には丸がある、みたいな。ここら辺が自然とイメージとして出てきてるかなってのが、最近の。



「Drawing works」 2010

本田：これ、最初の頃のドローイングにも、丸があってっていう感じですよな。

下園：これは丸と曲線があって。実は、この一番でかい「塔」の作品の中にも丸の要素がいっぱい入ってて。当時「塔」はなんで描いてんねやろって、自分の中であってたけど、その時の制作意欲とか象徴としてのシンボルに「塔」ってのはイメージしやすいんやなって。

本田：結構、ずっとシンボリックなものをずっと描いてきてるんですね。

下園：結構ずっとシンボリックやねん。いつも、逆に人間が描けへんくて。「塔」のやつは制作過程がめっちゃ変わったから、もったないってことポートフォリオにも過程を載せてた。

大学の頃の話



「Creature Tower」 (2011)

本田： こういう最初の頃って今のに至る前段階ってところですかね。この時からわりと自然的なものを描いていた？

高原： 安直な印象かもしれないですけど、神話的なものを感じる描写？

下園： 俺、学生の時に盲目的やけど、信仰の様に絵を描いていたから。そういう所やと思う。わりと自分の中でも、5歳くらいの時から自分の信仰心みたいなものを感じる場面があって。保育所がお寺の系列やって、御仏様を拝みますみたいな歌を歌うんよ。でも、うちは無宗教なので、「御仏様」ってなんなんやろなって思ってたんな。拝んでるって事をずっと考えてて。で、はたまた小さい頃レジャーで遊びに行った時に、嫌な思いをした時。「もう嫌だ帰りたい」って時に、「神様なんでこんな仕打ちを！」と思ってたんやけど、「あれ？俺、神様って思ってるけど、神様って何や？」みたいな。で、大学に入る時にクリスチャンの友達がいる、興味があつたからついていって、教会に行き、洗礼を受けて、クリスチャンになって。教会にはちゃんと通ってたんやけど、やっぱり多感なお年頃やから、色々考えてるうちに教会自体からは離れて。ただキリスト教の聖書の中の言ってることとかは、なかなか人間として人道的やからいいなーとは思って。

本田： それってクリスチャンなる前から聖書読んだりとか、そういう神話とか興味持ったりしてたんですか？

下園： 神話に興味は持ってたけど、聖書読んだりとか仏教のこととかについて調べたりはしてなくて。内容に興味を持ち始めたのは、自分がクリスチャンになってからで、聖書の旧約とか新約とかに出てくる神のイメージ像って。たまにイメージ像が具体的に書かれてる時があって、それって結構、仏教のキャラクターの表しかたに似てるな、とか。リンクしてるんじゃないか、とか。どっかしらで混じってて実は一緒なんじゃないかとか。ていう風に思い始めたら色々収集がつかなくなって。そっから色々知りたいと思うようになって。だから、カテゴリー的にはクリスチャンなんやけど、大学の時はお寺でバイトしてたりとか。

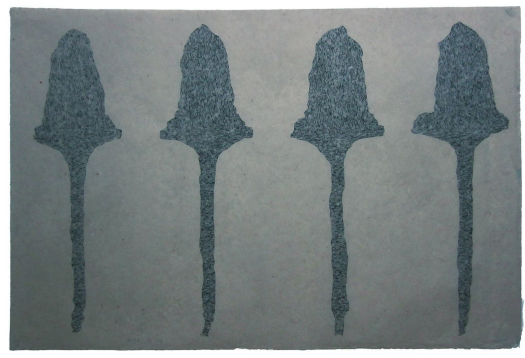
本田： ちなみに、日本画にいった理由ってのは？

下園： 日本画に行った理由は、ただ単純に絵が描きたいなって。絵だったら、俺、人生の時間をつぶせる気がすると思って、大学を目指したんだけど。高2か高3の時に、京都国立近代美術館の若冲のブライスコレクション展を見て、すごさに圧倒されて、日本画っていうのでこれが描けるんだったら、これにしようって。そのころからボールペンとかで絵を描いたりしてたんで、線描っていうものに対する趣向ってのが、ペインティングより強くて、惹かれて入って。でも実際の現代日本画ってのは、岩絵具をバリバリに使う技法で示していくみたいな作業やったから、あんまり途中でいいなって思わなかったから、同時代でやった作品もそうやけど、学生の頃の描き方って、途中からナイフで削ったり、フォークとかで引っ掻いたりして、シャープな線を引くっていう作業をしてた。

本田： とはいえ、日本画でも線的な仕事でいくっていう方法論もあった訳じゃないですか。それを選ばなかったっていうのは？

下園： 線を墨で描くのも好きやったんやけど、大きい作品を描くのに墨で細い線で描くっていう発想がなくてそれはむしろ大学を卒業してから試し始めた。「線描実験」という作品を1年くらいかけてずっと100号に描いてて。それは、ボールペンと鉛筆だけで描いてて。その面を黒く塗ってるのも鉛筆で塗ってんの。線でどこまで何ができるんやろうって。途中で破綻しちゃったんやけど。それやって、大きさには大きさに見合った線描があるんやってのを思って。ドイツの時のドローイングは、線の集積によって意識とかがどんだけ反映されるかとか。あとは、人間が構成する等間隔のリズムによって生まれる人為的な神聖さ。例えば、伏見稲荷に並んでる鳥居の配置とか。すごく神聖な感じがするけど、よく考えたら道に並んでる歩道のポールとかも全部一緒なんやって。なんでそこに神聖さを感じるのかっていう違いとか、なんなんやろうって感じながら描いてて。そういうのを繰り返し描いてた。でもあるところで、もう一旦やめるかって。

線と日本画の話



(左2点)「線描研究」2013、「Drawing」2012

本田：あとはこの前の話で、結構日本の話とか下園さんの口から多く出てきてたと思うんですけど

下園：日本に対する意識は、やっぱり日本画というジャンルをやっていた事、その頭を引きずってドイツに行って、相対的に日本を考え始めたから。僕は、日本人は線描が好きやと勝手に思ってた。そもそも、なんで自分がドローイングをやってるかっていうと、よく分からない。そこは謎。線が好きだから日本画をやってるって言うても過言ではないけど、線描が好き理由はちょっとよく分からなくて。ただ、僕の中で、毛筆っていう文化も大事で。日本、中国、韓国ぐらいにしかないような気がして。それって意識がかなり反映される線描というか。硬質ではない、ペンの筆先とは違う、濃淡とか筆圧によって、意識の伝わりやすい線描をもつ文化。日本人はそういうものに親しんできたのかなあと思ってる。

高原：そういう知覚できないレベルの土壌みたいなのはなんかあるんでしょうかね。

下園：自分が線描が好きなのは自覚してる。だから、高原がペインティングをしてるのは、そこは違うところやなーと思う。

本田：あとは、描く早さの問題とかもあるんですかね。なんかその引っ掻く系のやつとかから、画面の中に「動き」の要素が占めてきてるような。それこそエネルギーとか。そういうものを捉えようとする時に、どうしても早さとか描きやすさみたいなのがあるのかなと思うんですけど。

高原：僕は逆にそれを排除しようとしてる節があって。ササって流れとかスピード感みたいなものって定着するじゃないですか、画面に。僕は意図的にそれを排しようとする所があるけど。それを残そうっていう線描ってのはそういうことで。

下園：線描の魅力のひとつに、毛筆、墨を使う場合って、今言ってたスピード感っていうか、痕跡としてのエネルギーの出し易さみたいな。日本画の魅力的な作品で薄墨の線でシュって書いたりするやんか。最初見た時には、何がいか全然分からんってなってたんやけど、途中で、あっ！と思う瞬間があって。やっぱ痕跡って、色んな人が痕跡ってものを意識的に使うけど、日本画と違う所でもボロクはシュっていう絵の具の濃淡とか飛び散り方で、エネルギーの痕跡を見せている。墨も多分、線でシュッと描くことによって、画面から動きの痕跡を感じ取れて、なおかつそれが何かを模してるっていう、そういう面白さなのかなって。

高原：ただ、日本画で言ったら若冲なんですよ？線描が知覚できないレベルで、画面として見た時に。雪舟とかがザザザって描くような線描とはまた違うベクトルの線描じゃないですか？

下園：若冲は最初好きになって、今は色んなものが好きになってるので、スピード感のある線描、雪舟とかも好きになったんやけど。一番最初に若冲が頭から離れない別の理由がある。学生時代、「便利堂」という印刷会社でアルバイトを2年ぐらいさせてもらってた事があって。そこがガラス版を作って精巧な複製を作る工房を持っていて、僕の仕事は、若冲の作品をルーペで見ながら版の為の色を単色ずつ抜く事だった。毎日ずーっと見ても若冲って人は一切ミスしてないのよ。あれに関しては、日本画どうこうとかよりも、アールブリュットとかそういう方面の異常さみたいな凄みを感じて、今でも好きなんやけど。ただ僕の作品と若冲がリンクしてるかどうかは謎。

高原：若冲に関して言えば、あの人だけは異質で、僕的には西洋的なこってり感を感じるんですけどね。かなり日本画、洋画で言えば洋画的な扱い方をしてるなと思うんですけどね。

下園：若冲って、みんな好きなんやと思ってたけど。意外とアンチ若冲もいるんやね。工芸的すぎて嫌みたい。俺は工芸的っていう見方をしたことはなかったけど、超絶技巧を嫌う人もいるやんか。ただ、ホントの超絶技巧は、技を示すってところをすでに超えてるやんな。なんかできちゃうし、好きみたい。僕も本気でしたら細かいのは達者に描ける方やと思うんやけど。

本田：意識的なところで言うと、装飾的なところとかは残ってるのかもしれないですね。そんな直接的に影響してるとかじゃないと思うけど。

下園：どっちかという若冲が好きと言いながら、日本画の中で影響を受けてるとしたら、北斎の「波」とか。文様のな表し方。僕がドイツに行ってからずっと線描の反復で描いてるドローイング、あれも線の動きが、どれもほとんど同じなんです。自分の身体の可動域に、負荷がかからないように繰り返しの線で描いてるから。そしてそういう線は、集積とか組み合わせによって色んなエネルギーを表すことになるってことが、数を書く事でわかってきた。ドイツで展示させてもらって「あなたの作品は毛皮のように見えるね」とか「人間の髪のように見える」とかそういう風に言ってもらい。そこらへんから、線描自体の集積とか、当時は半分くらい執念みたいなもので描いてたんやけど、線描の可能性みたいなを感じて。でも、ドイツから帰ってきてとりあえず反復の線描は一区切りにした。で、色んな線をごちゃ混ぜにした100号のやつとかをやってたんやけど、最近また線描の面白さに楽しんで戻ってるというか。最初的话题に戻るんやけど、僕は画面にエネルギーというを込める事がしたい。その延長線上で今は「心」を書いてみたい。僕の観点をザックリ言うと「心」は目に見えないエネルギーの集合体で、それを表す為に形而上的なふさわしい形があるんじゃないかと探している。そしてそのエネルギーを「線」を使うことによって表現できないかと考えている。

リアルさをめぐって

高原：脱線でしかないですけど、日本画の話で若冲って僕、すごいと思うんですけど、嫌いでもないけど、別に好きでもないっていう。僕が好きなのが狩野山雪とか、狩野山楽とかあの辺なんですけど。無理矢理対比させれば、山雪とかモンドリアンに近い感じやと思うんですよね。ある種の構成であって、画面に対しての絵画的な意識。僕はそこが好きで。あるいは、長谷川等伯とか。余白が肝みたいなその感じ？いわゆる日本画の神髄っていうのは、その余白にあるような気がして。

本田：若冲とかっていうのは、そういう王道的なところではない「奇想の系譜」みたいなやつで。

下園：僕は今、若冲が好きかと言われるかと言うと違うけど、東大寺の大仏とかと一緒に、見たらすげえって思っちゃうみたいな存在。

高原：そこで僕がいつも思うのが、「リアル」っていうのはなんなんやろうって。リアルなものに対して人はすごいって思うと僕は思ってるんですけど。リアルっていうものは、本来は今日の前にあるもののことであって。でも、それがぼやけてて、おそらくリアルなものを描写して表現したものを見たときに「すごいリアル！」ってその時はじめて思う。それって何なんだろうって。プレステが出たときに、スーファミから移行して、次世代機ってなって。ドット絵やったものがポリゴンになって。当時の人間は「リアルやー！」って言って大興奮した訳ですよ。あれはアニメーションであり、CGであり完全なるフィクションでしかないのに、描写がリアルだって思う訳ですよ。そこにある種の感動を覚える人もいたり。

本田：そういうリアルなものへの人間の欲望みたいなものってありますよね。写真ができ、映像が撮れるようになり、そういうプレステとかの再現度がどんどん上がっていき、もはやVRとかになってくる。それってもうひとつの現実みたいなものを作り出そうとすることへの欲望、というかもう一つの現実を手に入れようとする欲望みたいな。

高原：分かるんだけど、ヨドバシでテレビコーナーとか行って、超画質のモニター見たときに、肉眼で見るよりきれいっていう。だからちょっと度がきつい眼鏡かけてるみたいな感じ？そのことリアルっていうんかなって。

下園：感受性を強めた視覚みたいな。

高原：多分、僕らが目指すべきリアルっていうのは、眼鏡を外して見える世界のリアルっていうのを具現化すべきなんじゃないかなと思う。

下園：「心」を描きたいなって思ったときに、良くないことかもしれないけど、みんなを絶望させたいと思ってた。それは、社会ってものを考えた時にとても危ない部分があると思ったから。それに対する事前治療というか。人間は自分の心の軸を意識しておく必要があると思っていて。今の人にとって社会という大きな枠組みはとても大事で、おおよその価値基準にもなっていると思うのですが、一方で排他的な側面を持っています。その弊害として自殺とかが起こると僕は思うんです。まず、生き物として自殺ってものはすごくおかしい事じゃないですか。何故そんな事態が起こるのか、これは自分が主軸として定めている世界観から一方的に切り離される事によって起こっているんじゃないかと、これには日本人の無宗教観も手伝っているのですが、人は自分の思想基軸を選択出来る時代になっているのに、何も選択しないまま社会観が自分の基準として設定されてしまっている。無意識に。この無意識の心の軸を人それぞれが自分自身で選択する事と、心の軸の部分への意識を向ける事がとても大事なんじゃないかと思ってます。それが出来ることによって、社会っていうものがただ参与している世界観ではなく、向き合うべきものとしてクールにとらえられるんじゃないかって。社会が現実なんじゃなくて、現実の中に社会と言う形がひとつある、そう思える様に。心っていうものの構造を描いたらいいんじゃないかって思ってる。

高原：そもそも論ですが、下園さんは美術をやることによって、社会を、あるいは社会に生きる人たちの考え方を変えたいですか？

下園：社会全体を変えたいとは思わないけど、社会全体を通して、俺に触れた人には、そういうことじゃないですかね？っていう話はしたいかな。

高原：それを積極的な目的として設定してます？

下園：今はそうかもしれん。それに関しては、意識的にやってるっていう感覚はあるかもしれない。さっきの絶望してほしいっていうのは、バリバリ社会に今参与して楽しいっていう人がいたら、そんな人には俺の考えは別に知らなくてもいいことなんです。社会で充実してる人に、あなたの参与してる社会は、実はあなたの意識に組み込まれた幻想みたいな、サバイバルから逸脱した理想郷みたいなところで成り立ってるだけのシステムです、だなんていうことは。ただいつか、あなたが苦しかった時は、別にそれに準ずる必要はないんですよってことを言いたいんじゃないけど。でも、別にそれで困ってる人じゃない限り、俺の絵をそういう風に見る必要はないから。だから、俺の思ってることを全部一から共感して欲しくて説明しようと思ったら、ほんとに理解したいっていう人がいたらある意味、現状には絶望しちゃう人もいるかもと思って。積極的に言えば積極的で、ある意味人を救いたい気持ちはあるけど、すべての人に当てはまるとは思ってない。

高原：僕はそこを目的に据えることが、それを積極的に据えることを避けるような節があって。なんか危険なおいがする。

下園：確かに第一目的でそれっていうのを設定したら、どんどんズレていくというか。前の話やけど、「誰か近くの人のためにやってる」っていうところ？やんわりした気持ちではそういうところもあるような気がするけど、納得はしがたい。結局はやりたいことをやることには変わらない。でも俺の場合は、展覧会っていう設定があった時に合わせてしまうところがあって。愛媛で展覧会をしたときに。

本田：2014年の？

下園：そう。なんでこの時、鳥の絵を描いたんやろう？これはやんわりした話なんやけど、僕は鳥って人間と似てると思って。人間と似てるけど、神の伝承にもよく使われるから、もしかしたら神様の化身なんじゃないかって潜在的に思ってるところがあって。だからシンボリックにそういう雲とか抽象的なもの以外を描く時には、鳥に落とし込んだんやうというか。存在的なものが鳥になるというか。でも愛媛の個展が大盛況で。それこそ個展っていうフィールドを作る意味では大成功したんやろうけど。喫茶店？というか焙煎所兼コーヒーを飲むところなんだけど、そこにイラストレーターみたいな人がコーヒー屋さんのパートナーみたいな感じでいて。元々ものづくりをする、ふんわりとした雰囲気がある場所。そういう場所やから、ものを詰めていったら、すごくいい空間になったんやけど。多分、ホワイต์キューブの展示に慣れてる人からすれば、なんやこれっていう。東京から知り合いが来たときに、この空間すごいことになってるねって言われて。真ん中に天体のドローイングを置いたのは、ここの空間を一周してもらうための真ん中の中心軸として置いて。電気は全部、蛍光灯を消してもらって。ギャラリじゃないし、空間を楽しむってことも含めて。僕の中で、鳥は神話的なモチーフでもあるから、それで太陽なんか？神話的な空間を作り上げようっていう意識があった。

自然の話

下園：過去作を出すってなったら、縦長の台風のやつ（写真右）を出したいなあって。

高原：これって墨で描いてるんですか？

下園：これは墨も岩絵具も入ってるけど、基本的に黒とか黄土の岩絵具くらいしか使ってなくて。さっきレジュメを見させてもらってて。例えば、高原が横の軸やとしたら、縦の軸で今、一番表しやすいのはこれかなって。

本田：ドイツから帰ってきてから、わりと自然現象的なものを描く。で、渦っていう話じゃないですか？で、この最初の時点では、自然現象っていう括りで、雷とか雲とか。これ（「Phenomenon」2014）はモチーフがあるとかじゃなくて？

下園：これはエネルギーと出土品のイメージ。で、これはなんで丸にしたかっていうと螺旋丸みたいなイメージ（笑）。球状のもので世界を表して、その世界の中にエネルギーを集約させるみたいなの。で自然な、勢いのある線で真ん中の方に集約させていって、密度として差異を出したら、自然現象のようなものを描けるんじゃないかって思ってたと思う。

本田：例えば、ここら辺の雷とか雪だったりとかって、どういう風に描いてるんですか？何か写真とかを参考に描いたり？

下園：それは自分の中のイメージで。それも下書きなかったんで、立ち上がってきてから、これもドローイングとか色の使い方で。ずーっと京都で学生してる時に、京都御所で空を見上げてる時に、空は一生こんな風にきれいに描けへんなと思って。空が一番すげーと思って。雲が一番美しいものなんじゃないかっていう意識があって。だからそういう憧れもあって、抽象的になった時に、僕は勝手に雲に当てはめてしまいがちというか。だから途中途中に入ってくる線描も雷みたいなものやったり。日光みたいなことしたり。最終的に落とすところとして、天候のタイトルをつけた。

本田：じゃあ最初から、そういうものを描こうと思ってた訳じゃなくて、描いてからそういうタイトルがついたっていう。ちなみにこういう台風とか竜巻とか、実際こんなすごい雷雲みたいな雨みたいなことに直面してることってあるんですか？

下園：台風に関してはイメージでしかないけど。僕が卒業した年の、6月にドイツに行ったんだけど。その行く前に、めちゃくちゃ茨城県とかに竜巻来てたときがあって。家にいてもこれ大丈夫か？みたいな。基本的に下宿してる時ってボロいアパートばかり住んでるから。家が飛ぶんじゃないかっていう恐怖にかられて。で、その後

「Worlds end supernova」

2014

ドイツに行ったっていうのもあって。ドイツって氣候が穏やかで。あ、日本の雨って毎日がどしゃぶりだったんだってことに気づいて帰ってきて描いてるから。日本の天候が強いついていう感じが、僕の中に相対的にできてしまって。あとは、これまでに受けてきた諸々のイメージとか。あと、僕なんかわりと旅人なので。家にいない時に自然の煽りを受けるみたいな。自転車で旅してて豪雨に見舞われて死ぬかと思ったみたいな。

本田：僕もそういうすごいのを直接体験したことはないの、それがいい悪いみたいな話じゃないんですけど。無理矢理、話を繋げると、エドガー・アラン・ポーの渦の話も自分が巻き込まれた体験談を書いている訳ではなくて。あれも想像力の話な訳で。

下園：僕は多分、想像力って意味では、自然に対して恐怖した体験とかはあるから。それを飛躍させたり、溢れ出てきてるところはあるかも。よくフェリーとか乗ったりしてて、甲板とか出れるんだけど。夜のフェリーの甲板ってめっちゃ怖いよ。甲板にはちょっとだけライトがあるんだけど、まわりの海が真っ黒で。で、海って黒いんだってその時気づいて。「メールストロムの旋渦」を読んだ時も、黒い海っていう表現があって。そうそう海って黒いんだってのは、多分昔の人の方がよっぽどリアルに知ってたんだなあと。チャリンコで京都から新潟に行ったことがあって。北陸を走るから国道の8号線っていうところをずーっとチャリで走るんだけど。国道沿いの海岸沿いだから、海がバッシャーってなって。しかも見えない。見えないのに飛沫くるみたいな。その体験とか。自然に対する怖さみたいなのは、旅したことある人だったら共通のやつがあって。今でも、人の手が行き届いてないところって自然をリアルに感じたりとか。結構旅してて、つらい思いしてるのに、無計画なところが直ってなくて。屋久島に行って、とりあえず登ってみるかと思って、登ってる途中に、「もう今日は帰れないよ」って言われて（笑）僕、単独で勝手に登ってて、途中のすれ違ったインストラクターの人に言われて。でも上に山小屋あるんですよね？みたいな話をしたら、「山小屋あるけど…」みたいな感じで、じゃあ行けるって思って。で、行ったら山小屋あるんだけど、行ったら別に寝具が用意されてる訳ではなくて、誰かが置いていった薄い寝袋があるくらいで。で夜凍えて。朝起きたら、めっちゃ清々しいけど、おなか減ってるし。そういう場当たり的な行動してる。

高原：日本の風土って、僕は知らないですけどドイツと比較したら、雨振ってて傘さすじゃないですか？傘をさしてる時に、風吹いてるじゃないですか。あれっておかしくて。傘って別に風をよけるものじゃなくて、上から落ちてくる雨をよけるための道具。

下園：今、高原が喋ってる話を補足したら、ドイツの雨はみんな傘ささない。しとしとびっちゃんくらいしか降らないから。しとしとびっちゃん雨が秋から冬にかけてずーっと降ってる。だから、そこらへんは北の方だから、ノルウェーとかに近いのかなと思ったんだけど、夜が長くなるし、サマータイムっていうのがあるくらいで。ずーっと雨降ってて、たまに晴れたら、晴れたねみたいな。途中で、雨が冬になって雪に変わってきてみたいな。それも、しんと降ったりするくらいだから、みんなある程度のアウターを着てればそれでいいみたいな。だからパーカーのフードって本来こんな天候で使うんだろうなって。日本で雨を防ぐ為にフードなんて使わねえなって。それと比較したら日本の雨はやべーみたいな。



帰国後の話



個展「Undergarden」 cafe & gallery etw, 2013

本田：帰ってきて、etwの個展なんですけど。これは向こうでやってたドローイング的なものがほとんど？

下園：緑色のやつは日本に帰ってきてから。緑色のやつは後で見て全然気に入らないなと思って。なんかドローイングを黒で試したから、色ペンでも試してみたいって思ったけど、個人的に後で見たらだいぶ浅いなと思って。その当時からドイツのドローイングも縛りを一個一個に決めてて。

本田：だからさっきの緑のやつとか色味のあるものを試してみた流れっていう。

下園：そのドローイングも色が入ってるやつは日本に帰ってきてからやってるから。安い紙じゃなくて、雲肌麻紙っていう日本画の紙で描いてて。

本田：帰ってきてから描いてたものっていうのはどういうものを描いてたんですか？

下園：明らかに植物のイメージがあったんだけど。多分、ドイツのドローイングは全部シンボリックに描いてたから、ものとか植物っていうので、あるものとして描こうって思ったんだけど。多分、蕨とか線描の美しさとかを見せられるように描こうと思ったんだけど、うまくいたのかな？

本田：線描の実験っていうのは、個展のからですよ。個展の後からそういうのを描いたりしてて、形象みたいなところと風土の違いみたいな話からこういう2014年くらいの流れになったっていう。



「Layer」 MAKII MASARU FINE ARTS, 2014

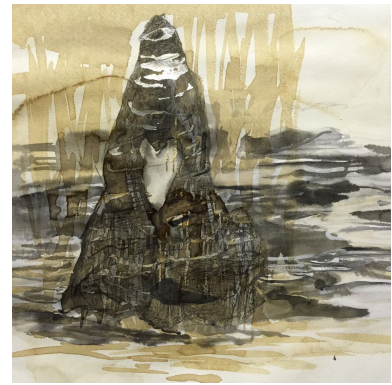
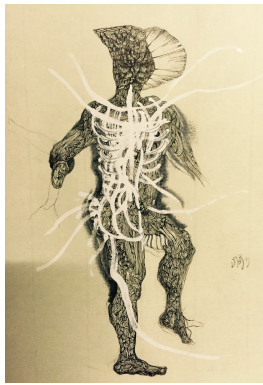
下園：それはUFOなんですよ。引っ掻きで、表面は銀箔で全部コーティングされてて。

本田：帰ってきて、日本画の画材で描くかってなって描いたみたいなの？

下園：無性に墨を使いたくなって。1年くらいボールペンしか使ってなかったから。で、墨を使ったら、日本画の画材も使いたいなと思って。基本的に今は、墨を活かすためぐらいにしか岩絵具使ってない。線描が活きるための岩絵具の使い方みたいなの。あとは岩絵具で個人的におもしろいなと思ってるのは、あれって砂粒だから。和紙って普通のケント紙とか画用紙と違って、柔らかいから鉛筆ののりが良くない。でも岩絵具を一層敷くことによって、ヤスリで一層削ったみたいなのだから、濃く線が出る。意外と線描の下地に面白い効果がでるなって意識ぐらいで使ってる。

高原：僕が、下園さんが学部にいる時の話で印象的で面白いなと思ったのが、日本画っていうものを、岩絵具ってものが、それはゾノさんのやり方なのかもしれないけど、重ねて重ねて削るから、自分で宝物を埋めて自分で掘る宝探しをしてみたい感じが、ってことを言ってたなあと。

下園：岩絵具を重ねて使う時は、その感覚があって。岩絵具って粒子なので、膠って水溶性でいつでも溶かすことができるから、それで引っ掻いたりとか、霧吹きでビシャビシャにして、一回積み上げたものを垂れ流して洗ったりすることによって、発掘してるとか、水の流れに身を任せてテクスチャーを作るみたいな時に意識するのが、水に対する意識と箔に対する意識。箔って酸化するっていうのはあるんだけど、貼るときにあたり風を意識する。息をフッってやるだけでどっか行っちゃうから、空調とか絶対切らないといけないし、自分がその時静止している状態を作らないといけないから、身体感覚とかをかなり意識させられて。筆もそうだし。で、土が流れていく重力に対しての動きみたいなのも眺めている自分みたいなもの。画面の中で自然を一種再現しているみたいな感覚。これは合田とも喋ってて、すごくそれはあるよねって話になって。



2015

「踊り」「china」「神立新岩」

本田：で、2015年。ここらへんはレジデンスしてる時に描いたやつですか？

下園：レジデンスしてる時は、人に見せるもんじゃないなってもを描いちゃったから。恥ずかしくて。レジデンスっていうお題だったんだけど、新しく道後にできたゲストハウスがそういうことをやってみたいって言って、1回だけやったやつだったんだけど。で、その後、東京で肅々とドローイングをして、これはその時のもの。2015年には主だった作品は作ってなくて。

本田：この時期は人とか、鳥が多いですけど、具体的にモチーフがあるものが多い。レジデンスとかでその場で作ってるからかなとかは思ってたんですけど。そういう訳でもない？

下園：そのドローイング自体はレジデンスとは関係がないんだけど、レジデンスをやったことによって何でもしていいんだなあってその年に思っ。できることもしかしたら他にもあるかもって、色んなドローイングをしたりした結果、ちょっと人も描いたことなかったなと思って。意識して避けてた訳じゃなかったから。意外と面白くなって描いたんだけど、それ以降は描いてないってだけで。ただ鳥は好きで選んじゃう。それは一応竜のつもりで。竜が雲をつかんで昇るっていう話を個展の時に聞いて。で、そこで面白い話を聞いたのが、日本の始まりの鳥っていう沼島（ぬしま）っていう話を聞いて。でその絵（「神立新岩」）が、思い出して描いた沼島の神立新岩っていう。これが沼島の横にポツンってあって。

本田：日本画の人って結構写生をしたりとか、取材にあたるものをして下絵描いて本画におこしてってあるじゃないですか。

下園：俺は、写生は最近ほとんどしないんだけど。昔もあんまりやってなくて。なんか写生しなくても、写生したら写生したまま描けるじゃんって思っ。どっちかという、そこにあるやつなんも見なくて描いて。記憶に残ってるものとか、見たものって、俺最近ずっと考えてるんだけど、よく「忘れてる」って言うじゃないですか？「忘れてる」って現在進行形で忘れ続けて。ただ、「思い出す」って作業があっ。 「思い出す」ってことは「忘れた」んじゃないで、「忘れてる」んですよ？忘れてる状態が一回解放されて、「思い出す」って状態に反転した時に、結構図像としてクリアに絵に起こせるくらいに思い出す時があっ。その状況って面白くなって。それって経験が死んでないっていう証になる気がして。僕いろんなとこにいきなり突発的に出かけたりできるタイプなので。遠方色んな風景を見てきた経験はそれなりにあるから。日本画の人は描いて取材とかするんだけど。それよりも、どっちかという絵に落とし込む時は、記憶を思い出すっていう作業にウェイトを置きたくて。

本田：それってどっか絵の材料を探しに行こうみたいなのではなくて。

下園：でも、絵作りのためってのはいつもあるけど。それを見てそれをそのままとかは全然思っ。ただ自分が見て記憶になるものは、脳のどっかに残されてるっていうのは、実証もされてないけど、信じてるから。それを実際絵に描こうと思った時に、線描っていうのが、メディテーションみたいな役割あるの。全然、関係ない線描とかをしてみて、ポンって思い出した時にそれを描いたりとか。わりとさっきの雪とか雪のドローイングはそういうところから始めてる。



「雷」「雪」2014



個展「Stormfront Pack」Utaco drip,2016

本田：で、2016年の個展ですね。これ真ん中のは天文台のGalleryweekの時のですね？

下園：そうそう。一部飾ってなかったやつもあったけど。天文台のやつをひっぺがして、裏から光当てたらかっこいいってなって。

本田：天文台は一応、二人とも共通でやったじゃないですか？どういう感じで二人ともやったんですかね？どういう作品をだしたとか。

高原：僕は第1回目から参加したんですけど、かなり学術的なところと芸術的なところの、歩み寄りみたいなことをやってたから、結構向こうサイドの人も来つつ。なんかJAXAの人が来てたってのが面白かった。1回目の展示で、条件が衛生画像を用いた作品であることみたいな縛りがあって。向こうサイドの予想としては、宇宙の写真を作品化したものだろうと思ってたものを、衛生から地上を見ていたもので、僕が出してて。月のやつと山のやつ。同じサイズで対にしてて、天地でやってたんですけど。その時に、JAXAの人も作品を出してて、その人が地上のやつをやってて。その人が「自分以外に日常のやつを出してる人がいるとは思わなかった」って言ってて。で2015年のGalleryweekはぶっちゃけ言うと、結構なし崩し的に、僕がこなしちゃった感じがあって。かなりその時、答えが出てない実験的な絵画を出しちゃった感じですね。その時は地図を描いてた。4色問題をやると思ってた時。4色問題を解いた人の、解いた日に黒板に書いた字ってのが残ってて。

下園：俺は1回目の時。個展の時のやつ（太陽）。天文台のやつはパネルに貼った状態で7枚出してて。衛生って言われてなんとも思いつかなくて。でも、とりあえず球体を描きたいって思って。太陽の観測図を。太陽だから月から日までの全部のやつをダウンロードして、眺めながら描いた。確か墨と水彩と色ペンだけ使ってて。

本田：言ったら、宇宙とかも渦に近い回転の動きをするじゃないですか。その太陽系とかだと中心にあるのは太陽だなとなんとも思ってた。中心を描くのが下園さんらしいのと、今ふと思いました。で、ぼちぼちまじめに入ると、この個展あたりになってくると、今に近い「渦」。なんで「渦」に至ったかっていうと「和」みたいな話でこの前聞いたんですけど。

下園：これ言ったか分からないけど、イザナミとイザナギの黄泉比良坂（よもつひらさか）の別れの話があって。それが台風を見てたときのメインテーマで。有名な話で、イザナミっていう女の神様が冥界に下ってしまって、それをイザナギが迎えにいくんだけど、行ってみたら顔が蛆だらけで、びっくりして逃げ帰ってきたっていう。あの話の顛末は、黄泉比良坂ってところで、黄泉の国と地上の国の分かれ目ところで、最後イザナギが、岩出パンって蓋をしてしまって、そこで二人が岩越しに会話するんだけど、イザナミが私はもうこの仕打ちのために、数忘れたけど、例えば1000人殺すと。でイザナギが、なら私は1500人生もうという話をして、日本の神話における生と死の誕生みたいな。その時の人間の例えがすごく面白くて。人間のことを、青人草（あおひとくさ）って言い方をしてて。それは、古語の文法的にあてはめると、「青々とした人のような草」らしくて。「青々とした草のような人」じゃないところがミソで。神からの視点からしたら、人は草みたいなもんだったっていう表現だったって。その時、僕はドイツから帰ってきたところだったから、日本の気候がすごい強いっていう意識があって。このすごく強くて、他のもっと違う土地に移住すれば、こんな災害もなく生きられるのに、ここに住み続けている人の土着性って、まるでそこから移動できない草みたいだなって思って。そこで刈り取られることをしてもなおかつ、ずっと生え続けるってことも日本人の土着性をすごい表してる気がして。これは日本の神話レベルの時代に、誰が考えた話かわかんないけど、その人々を俯瞰してとらえる感覚って今の現代人よりももっと的を得るなって。そういうところから、僕の描いた絵は、例えば台風が神の象徴で、そのまわりの草、地面の部分が人間で。人間の上に神が立ってるみたいな構図にしたいくて。それって宗教画の真ん中に本尊があって、横に仕えるものがあるみたいな。力の象徴とそれに虐げられたりしている象徴とか。それは台風を描いてるんだけど、神様と人の関係みたいなのも描いてる。



「Storm front」「雲」2016

本田：下園さんは特に横からの台風とか竜巻とかの描写が多くて、横から見ると中心って全然見えないじゃないですか。渦巻いているものしか見えない。下園さんのには、渦巻いているものと中心とってどっちの方が関心があるんですか？

下園：なんか現行では、中心は空洞っていうイメージが強くて。中心が空洞で、でも空洞が実は芯として大切に。横を旋回してる取り巻いてるエネルギーっていうのは、例えば人間だったら人間の精神とか肉体のエネルギーとして、それが人間を動かしているんだけど。実は真ん中の芯こそが司令塔みたいな、そういうイメージがあるから芯を活かすためにまわりを描いてるみたいな感じ。でも横から描いてるから、それなりの描き方を、今考えてて。この時は本当は、芯は考えてなかった。もしかしたら、展覧会で渦っていうテーマが設定されたことによって、僕の中で整理がついて、中心っていう考え方が強まったかもしれない。高原の絵を見たからかもしれない。高原はずっと上から見るから。上から目線だから（笑）

本田：とまあ、遡ってきたんですけど、今はドローイングを中心にやってて。この前ドローイングをこういう感じにやりたいみたいな言っていたのはどういう？

下園：そう、アートフェアで見た写真の。羅列してみたいなと思って、数があるから並べてみたのかなと。

本田：ドローイングは継続して展示までに描いていったりするんだろうと思うんですけど、それ以外になんか考えてるのって？

下園：とりあえず、今また竜巻を描こうと思ってて。家で3号くらいのパネルで、小さいドローイング的なやつを描いてみようと思ってて。ドイツ行く前に、これは完全に体験じゃなくて聞いた話なんやけど、竜巻が5本同時に茨城におこったときがあって。これは昔だったら神話になったんじゃないかって思ったのがきっかけだから。5本の竜巻描いてみたくて。横並びで、描いてみるとか、とりあえず試そうと思ってるのはそんな感じ。あとは、ドローイングみたいにやってるのをタブローとしてやってみようと。そんな感じですね。

2017.3.24（金）高原宅でのインタビュー